

一八世紀イギリスにおける大所領の経営

—— ラウザー家の分析 ——

岩 村 満*

The Management of Great Estate in Eighteenth Century England

—— the Analysis of the Lowther Family ——

Mitsuru IWAMURA

Abstract

The main purpose of this note is to make clear how estate management was carried out by the Lowther family in eighteenth century West Cumberland.

This family was famous for management of coal industry in eighteenth century. The method of management was very modern. This family devised to act harmoniously with other main colliery owners, but, in the other hand, it went ahead with the development of their own collieries. In result, this family did control the coal market and gain earnings in a keen competition.

The Lowther's collieries was developed by land purchases, increases of lease of collieries, and introduction of new technologies. These new technologies bore on improvement of drainage, poisonous gas, carriage of coal.

Key words : Lowther, coal industry, 18th century

一八世紀及び一九世紀前半のイギリスにおける地主の所領経営について、炭鉱業を営むカンブリアのラウザー家を取り上げて、検討を加える。ラウザー家の所領経営については J.V. ベキット Beckett の著書『Coal and Tobacco』¹⁾があり、それに依拠して、以下、纏めていく。

先ず初めに、一八世紀のラウザー家は地域の経済及び社会と密接に係わっていたのであるから²⁾、当時のカンブリアの状況を概観しておく必要がある。地形は険しく、カンブリアの丘陵と湖が一八世紀に旅行者を魅了するようになる前は、当地は他から全く隔絶していたし、伝統

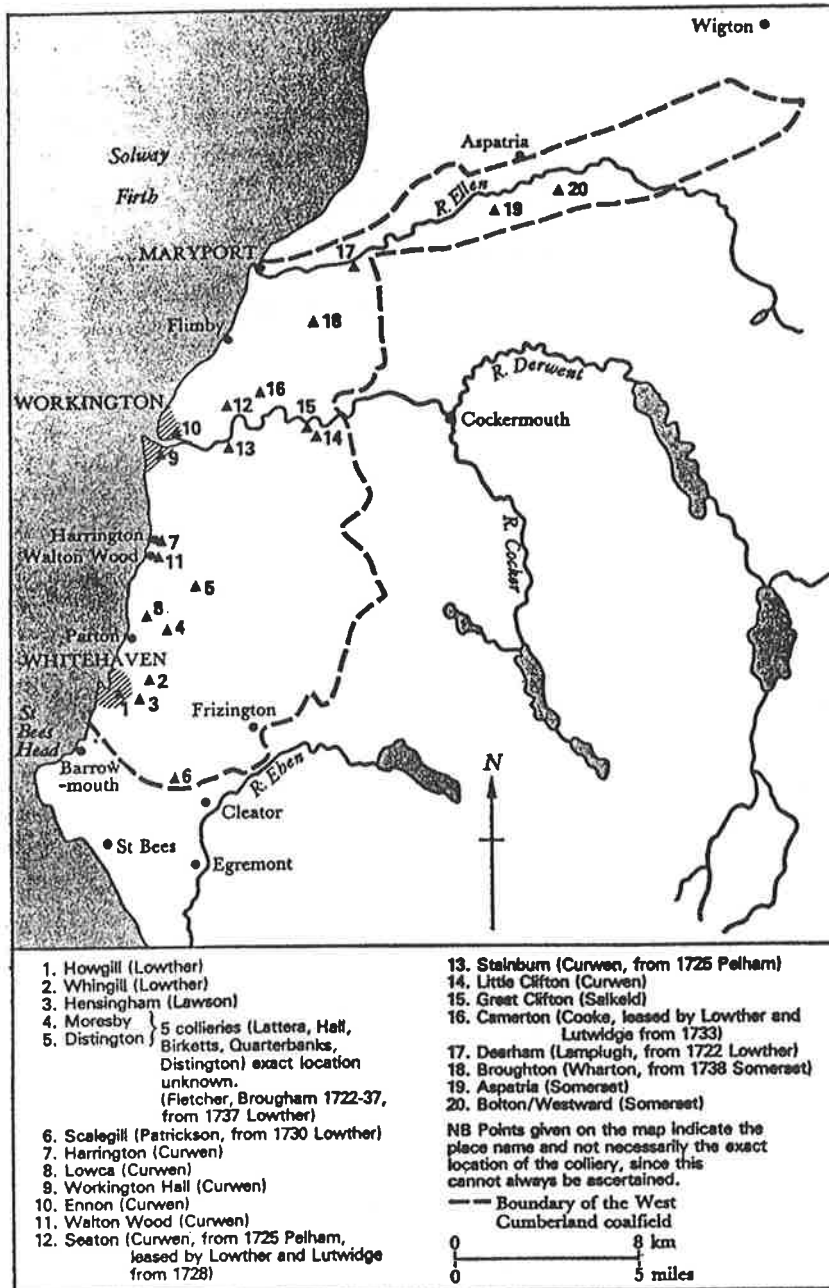
的にスコットランドの旅行者はこの地の地形を避けるために、イングランドの東側の行程を辿った。また、D. デフォー Defoe に依れば、当地は彼が通ったイングランドやウェールズの中でも極めて荒れた土地柄であった³⁾。因みに当地は人口の過疎地域であり、後に見るホワイトヘブンを除けば、一八世紀の人口は注目に値する三つの町、州都カーライル、ケンダール、ペンリスでさえ、各々2～3千人、2千人、1,350人に過ぎなかった⁴⁾。

産業といっても、一八世紀に発展し続けたのは石炭業だけであった⁵⁾。石炭を燃料とするような製塩業やガラス製造業も一時期盛えはしたが、長くは続かなかった⁶⁾。また、製鉄業も一七世紀には盛えたけれども、一八世紀には衰退し、1763年に当地の指導的商人の一人ピー

平成 13 年 12 月 21 日受理

* 総合教育センター・講師

地図 西部カンバーランドの炭鉱分布



典拠 : J.V. Beckett, Coal and Tobacco, p.42.

ター・ハウの破産の原因には、鉄工所の経営の行き詰まりも災いした⁷⁾。更に、1740年代初めに、ホワイトヘブンはたばこの輸入量でロンドンに次いで第二位であったけれども、そうした繁栄は長く続かず、1750年代にグラスゴーから取り残され、以後、その地位は回復することはなかった⁸⁾。

農業においても一八世紀を通じて、然したる発展を見なかった⁹⁾。殆どのカンブリア人は自給農業を営み、穀作はオート麦と大麦が中心であり、それらは家畜の飼料と自家消費に当てられた。小麦とライ麦は遺産目録にほんの稀に見出されただけであった。ただ、当地では家畜の育種と飼育が盛んに営まれていた。牛は6～12月にスコットランドからカンブリアに搬入された。それは冬の飼育のためにファーマーに売られ、そして春には更に南の牧畜業者に転売された。一八世紀末には1万頭のスコットランドの牛がカーライルの西2,3マイルに位置するプロウトン村で開催される9月の市で売却されるまでに牧畜業が拡大した。とはいえ、こうした農業が地域の産業を牽引し得る程の規模ではなかった。

従って、土地への関心も低く、1680-1750年に土地に1万磅以上を費やしたジェントリーは8～9家門に過ぎず、また、そのうち、土地以外の収入から得た財産でもって所領を獲得したのは5家門に限られた¹⁰⁾。ただ、ラウザー家だけは土地市場において最も重要な役割を担い、同時期において自家の4家門は併せて14万2千磅を土地購入に投資した。

次いで、ラウザー家の成り立ちについて鳥瞰する¹¹⁾。当家が西部カンバーランドに地歩を築いたのは1630年のサー・ジョン・ラウザーによるセント・ピーズマナーの購入であった。この所領は当家が後に係わっていくことになる炭鉱業の基盤となるものであり、2,450磅で購入された。サー・ジョンの後を第二子クリストファー(1611～1644)が相続した。クリストファーはアイルランドとの多様な繋がりを確立し、その関

係の構築はアイルランドへの販売を目的とした採炭、製塩を始めるに際して、頗る有益であった。彼はまた、1642年に準男爵位を授階したことにより、社会的地位も確立した。但し、彼は33歳の若さで死亡し、また、妻は彼より先に死亡してしまっており、唯一の息子で、しかも相続人であるジョン(1643～1706)はその時、僅か1歳でしかなかった。しかし、彼の成人後の活躍は目覚ましいものがあつた。所領の石炭資源を切開き、初期のアイルランド市場を征服し、ホワイトヘブンの小寒村周辺に新たな町を建設しようとした。彼は1664-1702年に議会で議席を得た。彼の後継者はジェームズ(～1755)であり、ジェームズは1694年にカーライルの代表として議席を得た後、1755年に至るまで、その間、僅か6年間にわたる期間を除いて、議会で活動した。このジョンとジェームズ父子は議会人としてだけでなく、商業を志向する資質をも共有した。ただ、彼等は商業的営みに邁進するに止まらず、貧民の雇用を促進したりして、地域社会への貢献を果たした。

ラウザー家の所領の拡大はサー・ジョンとサー・ジェームズの父子によって、積極的に進められた¹²⁾。それな主として炭鉱に係わる購入であった。ホワイトヘブンに近接した土地は兩人併せて、125件、45,858磅の購入によって纏め上げられ、また、ワーキングトンとメアリーポート港周辺の土地に13件、12,023磅が投資された。因みに、サー・ジョンは1701年までに5,300エーカー程に所領を集積した。この他にも、1740年代にレイラムマナーの購入に3万磅以上が費やされた。このマナーはロンドン西方60マイルの地にあつた。

ところで、地主が所領を統合しようというのは、決して稀なことではなかった。しかし、ラウザー家では炭鉱経営への関心が、そのような施策を活発にした¹³⁾。大規模な鉱山は広範囲の統合された土地を必要とした。というのも、出水に対する排水口及び排水路に多くの土地が割られなければならないからであった。出水対

策として一八世紀の蒸気エンジンの導入は画期的な改良を齎したけれども、それでもなお、採炭の採算を考えれば、この導入は大規模な炭鉱でのみ可能であった。

こうした所領を運営するにあつては、その管理のあり方が重要であった¹⁴⁾。殊に、不在地主であったラウザー家の場合には、当主の代役として、差配人は必要不可欠であった。取り分け、当家では炭山経営が所領運営の中心であったから、その管理の責務は重要であった。サー・ジェイムズは1706-26年に毎年、2度来訪した。所領への来訪が遠のくことは、所領の運営に悪影響を及ぼした。一八世紀の複式簿記の発展は金銭づくの差配人への直接的対応によるものであると言われている。1707年、炭鉱差配人ゲールの解雇は収賄の疑いによった。しかし、全般的に当家は有能な差配人にめぐまれ、ギルピン家とスペディング家は長期にわたるラウザー家の差配によって、名声を博した。

農場の規模を決定するに際しても、ラウザー家の方針は炭鉱業の利害に最重点が据えられた¹⁵⁾。鉱夫の多くは臨時雇いであり、当家は彼等に僅かばかりの地片を提供する必要を認めた。その土地は彼等によって、炭鉱で使用する馬の飼育もしくは雌牛の飼育に使われた。こうした方途は保有地の断片化を齎し、ギルペンが認めたように、改良を不可能とした。ホワイトヘブン近くの農場が小規模に止まったのは、そのためであった。

地代について見れば、漸次増大していった。1686年の679 磅から1730年の1,032 磅、更には、41年の2,965 磅、55年4,580 磅へと上昇した¹⁶⁾。付言すれば、1730、40年代の全国的規模での農業不況の影響は当地では軽微であった¹⁷⁾。それは当地が牧畜地帯へと転換を遂げていたためであった。

二

ここでは先ず、一七、一八世紀におけるイギ

リス石炭業の実情とカンバーランド石炭業の位置づけを見てみる¹⁸⁾。イギリスでは一七世紀に石炭は石灰の燃焼、塩製造、ガラス製造、及び明礬製造に使われた。しかしながら、一八世紀に至るまで全産出量の三分の二は家庭消費向けであった。産業の需要が拡大しなかったのは、石炭を利用した金属溶解技術がいまだ未発達であったこと、輸送費用が禁止的高さであったことが災いした。前者の課題はアブラハム・ダービーとヘンリー・コートが解決し、同時に運河の発達が輸送問題を取り除いた。イギリスの全産出量の半分が一八世紀において水運で搬送された。沿岸航路や運河によって、石炭はロンドンやオックスフォードの内陸部まで運ばれた。また、海運を通じて、西部カンバーランドの石炭はダブリンやその近隣の港町に供給された。

西部カンバーランドの石炭業を考える際に、アイルランド市場は重大な意味をもった¹⁹⁾。事実、サー・ジェイムズ・ラウザーは自己の石炭の90%以上をそこで捌いたし、また、1750年にアイルランドへ供給された石炭70~80%が西部カンバーランド産のものであった。この貿易は1605年に始まったけれども、西部カンバーランドがアイルランド市場の支配を広めたのは一七世紀末であった。ただ、そこでは固有の市場の問題が存在し、需要の継続性、自己調達の可能性、ウェールズやスコットランドとの競合が大きな課題であった。西部カンバーランドはそうした状況に対処しながら、アイルランド市場を確保していった。

西部カンバーランドの炭鉱はイギリスの他の地域と比べて、小規模であった²⁰⁾。表面は僅か90平方マイルでしかなかった。ホワイトヘブンの真南に当たるバローマウスから、北へ15マイル隔たったメアリーポートまでであり、内陸にはせいぜい5,6マイルの広がりしかなかった。

西部カンバーランドの炭鉱の分布は地図から判る²¹⁾。その中で、ラウザー家の重要性は保有炭鉱数が示すよりも相当大きかった、というのも、当家の炭鉱は総産出量で高い割合を占めたから

である。

次いで、ラウザー家と石炭業の係り合いについて見てみる²²⁾。ラウザー家は自らを炭鉱所有者として、そしてホワイトヘブンを大きな積出港として確立した。これは本質的にサー・ジョン・ラウザーの貢献であり、状況は1720年代まで大きな変動を被らなかった。そこで、先ずサー・ジョンの活動を検出する。

1630年代西カンバーランドで活動した二人の企業家地主がいた²³⁾。ホワイトヘブンのサー・クリストファー・ラウザーとワーキングトンのサー・パトリシアス・コーエンである。1636年2,400トンほどの石炭がクリストファーによって捌かれ、1631-37年の総利益は220磅であった。クリストファーを引き継いだジョンは当時まだ1歳であった故、長い未成年期を送った。このことが1640、50年代のホワイトヘブンの発展を阻害した。他方、コーエンはクリフトンで石炭を掘り、ハリングトンで鉄鉱石を採掘した。しかし、これら初期の努力は何れも崩壊した。また、コーエンの1664年の死後、後継者は石炭業に悉く失敗した。1673～1725年に所領の所有者であったヘンリー・コーエンは数多くの炭鉱を採掘したけれども、その結果は惨澹たるものであった。ハリングトン、ローカ、シートン、リトル・クリフトンの炭鉱は何れも1720年代初めにリースにだされた。因みに、それらの地代は年315磅であった。

こうした利害の欠如はサー・ジョン・ラウザーに有利に作用した²⁴⁾。他の企業家地主の利害が復活したのは1720年代後半になってからであり、加えて、資本を調達したり、重大な要求に身を賭ける熱意を示す者は他に存在しなかった。ラウザー家の石炭業の支配が始まった。当地の石炭産業はノーサンバーランドやダーラムの石炭業を混乱させたような内部的競争はなく、ラウザー家の経営のもとの成長した。

西カンバーランドの他の炭鉱所有者が齎した空白に乗じて、サー・ジョン・ラウザーは資力が許す限り、新たな炭鉱の開鑿を急いだ²⁵⁾。産出

量もしくは販売数量については1690年代中葉以前は残っていない。しかし、収益は1665年から漸次増大したことが知れる。そして、ここでの1680年代の急速な上昇は荷馬車道 cartway の導入が港への石炭輸送の費用を削減させた結果であった。

但し、1690年代には収益は後退した。それは二つの要因に帰せられる、即ち、アイルランド海を横切る貿易を妨げた戦時状況とサー・ジョン所有の石炭の販売価格の減少である。彼は実際、1689年には損失を被るまでに至った。その打開策として、貿易が継続するように船舶に十分な保護が与えられた、それでも収益は低い水準に止まった。

他方で、産出量は順調に伸びた。産出量の数値は1695年に始まる。当年の1万9千吨は三つの稼働炭鉱（ハウギル、グリーンバンク、ラテラ）から産出された。サー・ジョンの没年1705年までに生産は3万3千吨へと増大した。尚、アイルランド市場において1695、1705年に売却された石炭は各々、生産量の82、85%であった。このことから当産業のアイルランド市場への依存の度合いが知れる。

この生産拡大の趨勢はサー・ジェームズが1706年にホワイトヘブン所領を相続した後も続いた²⁶⁾。サー・ジェームズは生産を拡大する一方で、父が手懸けた炭鉱の生産の幾つかを保留した。というのも、同時に操業するには炭鉱が多すぎると確信したからである。また、古い炭鉱が掘り尽くされるまえに、新しい炭鉱が掘り始められるのがよいと見做されていたからでもある。

こうした経営方針を具体的に見てみる。生産は1707年グリーンバンクとレッテラで中止され、次の7年間はハウギルでのみ石炭が掘り出されたけれども、生産の拡大基調は継続した。1714年、グナーデン炭鉱のリースが購入され、また、レッテラが再開されたことで、パートンに新しく築かれた埠頭が活用された。同時に、彼はホワイトヘブンの東側に位置する古い炭鉱ウ

インギルを再操業した。これは17世紀末にリースに出されていたけれども、1706年以来、未使用の状態にあった。1712年、ウインギルが調査され、1714年に生産が再開された。ハウギルとウインギル炭田の産出量は1717年にはほぼ6万6千屯に達した。尚、そのうちの94%はアイルランドに送られた。加えて、レットラとグナーデンにおいて7千屯が生産された。1695~1750の間のホワイトヘブンの輸出売却は不況による中断を含むものの、全般的上昇傾向を呈示する²⁷⁾。

これらの統計は全期間をおおう、唯一の詳細な統計である。とはいえ、1730、40年代においてかなりの数量が他の港湾から船積みされたため、これらの数値は石炭業の状況に対する絶対的指針とはなりえない。無論、ハウギル炭鉱は最大の生産力を誇り、一八世紀を通じて最大規模の輸出炭田であったことから、上記の統計は十分、趨勢を反映するものではあった。

更に、ラウザー家の市場への対応を見てゆく。石炭売却の拡大傾向は1717年に一時終了し、その後数年間は不況が続いた²⁸⁾。石炭産業の環境の変化と相俟って、このことは重大な結果を齎した。統計上からは需要の短期的減退は必ずしも、災禍を惹起するわけではなかった。サー・ジェイムズのホワイトヘブンにおける輸出売り渡しは1717年6万1千屯の頂点に達し、これは1725年まで破られはしなかった。しかし、ここにおいて石炭産業が如何に営まれるべきかの再考を強いた状況が幾つかある。即ち、それは不況（バリーキャッスルにおけるアイルランド人による採掘の成功と関連した）、アイリッシュとの競争の拡大、ハウギル炭鉱の存立の見込みの危ういさ、である。サー・ジェイムズは価格と産出量で他の所有者との合意に達するか、もしくは独自に対処するかの何れかの選択を迫られた。当初は後者の途を選んだ。

先ず、産出量を確保するための手段が講じられた²⁹⁾。というのは、ハウギルの状況は重大さを呈していたからであり、1719年、ラウザーはホ

ウギル北の全炭鉱は4年間は従来通り稼動するとしても、その後は出炭量は半減するものと危惧していた。具体的にはホワイトヘブンの内陸部へと掘り進められ、ハラス及びヘンシンガムへと鉱区が拡大され、また、ホワイトヘブンの北隣りのモーズビー炭鉱での生産が拡大された。鉱区の内陸部への移行に伴って、石炭の移送問題が生じたけれども、それもwagonwayの導入によって克服された。加えて、ラウザー家は輸出用石炭の品位を保つことによって、ワーキングトンとの競争を打破した。当地でのダブリン向け荷積み船舶は1706、11、16、20年に各々40、46、69、68隻であり、西部カンバーランドの総数の14~16%であった。

その他にも市場に対応するための試みが幾つかなされた。スコットランド人炭鉱所有者の影響力を打破するために、1720年代初め、アイリッシュのスコットコート炭鉱のリースを考慮した。貿易に最適な船舶を建造した。夏季と冬季の二重価格制度を導入した。しかし、これらは十分な成果を収めることができなかった。

そこで、産出量と価格を規定するために、ワーキングトン周辺のコーエン炭鉱の賃借り人との合意へと方針の転換がはかられその取り纏めがなされた³⁰⁾。このような合意は不況時のタイニーサイドではごく一般的な事柄であった。将に、この理由でもって、大合同が1726年に生じ、1750年頃まで効果的に当地域の石炭産業を統括した。それが可能であったのも、ラウザー家が西部カンバーランドにおいて強大な支配的地位を保持していたからである。困みに、大合同が1733年に再協議された時、彼等のうちの3名が売り渡しの57.1%を供給していた。その中で、ラウザー家は最も強力な地位にあった。

こうした事由により、当初は独自の対応において十分な成果を獲得しえなかったとはいえ、その後も当家の拡大路線は継続された³¹⁾。先ず初めに、ホワイトヘブンの地歩を固めるために、土地購入によって周辺地域への拡大をはかった。そうした1720年代後半と30年代の購入に

については既に述べた。既に、ホワイトヘブンの炭鉱に膨大な投資を行っていたので、リースによって生産基盤を広げるよりも土地購入によって生産基盤を確固たるものにする方が合理的であった。

第二に、ラウザー家は他の炭鉱所有者、就中、コーエン、サルケッド、ワートン伯を説得して、彼等の権利をリースもしくは購入した。この成功によって西部カンバーランドでの産出量を増大させることができた。具体的には、1722年、メアリーポートでの地歩を確保するために、その後背地にあるデアラム炭鉱を購入し、そこでの生産を続行した。次いで、ワーキングトンでの取引きを掌中に収めようとした。それを可能にしたのは、1728年のシートン炭鉱での保有地のリースと統合、1733年のカマートン炭鉱の31年リース、45年の同炭鉱でのリース地の拡大であり、また1735年のグレート・クリフトン炭鉱からの年7千磅の石炭の購入契約の締結であった。

かくして、独占には至らなかったけれども、1740年代初めまでに、ラウザー家は西部カンバーランドの海岸沿いの四つの石炭積出し港、ホワイトヘブン、パートン、ワーキングトン、メアリーポート総てにおいて、石炭業の中心的立場にあった。これ以降も、当家は所領の拡大に腐心した。1758年、チャールズ・ペラムの所領を5万5千磅で購入した。それはスタインバーン炭鉱、ロッチェングトンマナー、ホワイトヘブンの南東部所領、メアリーポート近郊所領、セント・ビーの土地を齎した。

ところで、ワーキングトンとメアリーポート港の発展について付言しておく。ワーキングトン港では1741年までに規則的に40隻が石炭業に従事した³²⁾。そこへの供給の殆どはシートン炭鉱からであった。シートンの生産は1728年の6千屯から、32年1万2千屯、39年3万4千屯、53年3万9千屯へと拡大した。ハウギルを除けば、同鉱はラウザーにとって最も重要なものとなった。船舶数からみて、同港で船積みされる

石炭の80%がラウザーとルートウィッジが供給した。

メアリーポートの発展はサー・ジェームズの晩年に生じた³³⁾。輸出石炭は当家のデアラム炭鉱から供給された。1740年までに年産4千屯に達し、1749年の港湾改築に伴って、貿易が増大した。1777年に30～250屯の船舶70～80隻が石炭業に従事した。

1750年までにラウザー家の炭鉱は年17万屯の石炭を産出し、その大半はアイルランドに売却された³⁴⁾。これは西部ミッドランドの輸出の90%ほどにも達した。加えて、当家はワーキングトンでの支配的な利害をもったし、更に、メアリーポート貿易にも寄与した。以上のように、他の炭鉱所有者との協調を維持しながらも、ラウザー家は自らの炭鉱の拡大を計った。

加えて、企業家地主は経営上の数多くの問題に対処しなければならなかった。生産、運搬、市場からなる複雑な組織体制が横たわっていた石炭産業において、炭鉱所有者はその利害の調整は必要不可欠なものであった³⁵⁾。石炭の流通において炭鉱所有者は1730年代中葉までは直接、船積みとは関係せず、石炭は波止場で船の持ち主に販売された。船主はダブリンで石炭を売却したけれども、それは通常、市場の仲介人に対してなされた。

産業の構成部分が別れているとしても、生産、運搬、市場の三つ全ては大いなる共通利害を有した。取り分け、それは炭鉱所有者と船主に妥当した。カンバーランド地域内での石炭の需要が限られていたので、炭鉱所有者はアイルランドでの販売に依存した。それ故、炭鉱所有者は船主の利害を常に優先的に考慮し、彼等はアイルランドの規制に抗して、可能なところではどこでも船主を保護した。しかし、他方では、船主が貿易を停止するような団結に追い込まれないように行動する必要があった。

次いで、経営上の問題にラウザー家はどのように取り組んでいったのかを検討する³⁶⁾。西部カンバーランドの石炭生産は富裕な土地所有

者による独立経営の領域であったけれども、膨大な投資の必要は彼等の自己犠牲を強いた。サー・ジョンとサー・ジェイムズは一世紀のうちにハウギル炭鉱を50万スターリング上昇させたと言われている。しかし、そこに至るまでは幾多の事態への対応を迫られた。

ラウザー一家の人々は炭鉱労働者のストライキを殆ど体験しなかったとはいえ、炭鉱から港まで、自らの馬と荷馬車を保持して、石炭を運ぶコール・リーダーはストライキを起こしがちであった。

また、事故は頻繁に発生した。その多くは爆発であった。そして、事故での補償が必要とされた。

更に、新技術の導入は石炭産業にとって死活的重要性をもった故、ラウザー一家はそれへの対応を要求された³⁷⁾。ハウギルが一八世紀を通じてラウザー一家所有の中で最も生産性の高い炭鉱に止まりえたのも、一連の技術革新が実行されたからである。

先ず第一に、排水が主要な課題であった³⁸⁾。1716年、揚水のためのニューコメン・エンジンが導入され、排水問題が一気に解消された。差配人のジョン・スペディングが導入を強く主張した。ハウギルでのこのエンジンの導入は全国で六番目であり、1730年代に更に、3台が導入された。西部カンバーランドの他の地域で導入されたのは、漸く一八世紀の後半になってからであった。こうした方法での揚水はサルトン炭鉱での深層部への採炭を可能とし、生産量の増大に与かった。同炭鉱では1734～51年に年産1万5千屯以上が出炭され、この時期の総出炭量は27万屯を越えた。

第二に、1717年、発破のための黒色火薬が使用された³⁹⁾。これはタイニーサイドより2年先んじた。

第三に、揚水に劣らず問題となったのは、有毒ガスの発生であった⁴⁰⁾。一八世紀において鉱山の死亡と傷害の最大の原因は爆発であった。しかし、大きな改善は1720年代にハウギルを初

めとするホワイトヘブンの炭鉱でなされた。それはカーライル・スペディングの実践とウィリアム・ブラウンリグの科学的天才の結果であった。そして、このスペディングの通風装置がタイニーサイドに普及していったのは1760年代中葉であった。但し、そこでも爆発を完全に阻止しえず、1810年のジョン・バドルのスピリット・エアー・システムの導入がまたれた。

第四に、1730年代初期のwagonwayの設置が炭鉱から港までの輸送コストを著しく削減させた⁴¹⁾。1710年代までは軌道荷馬車cartwayが使われていた。しかし、この方法では各々の荷車が単一の馬に曳かれた故、距離が嵩むにつれ、輸送費用も大きくなりすぎた。結局、1720年代初期に内陸部での採炭が進むにつれ、cartwayは非経済的になった。それに取って代わったのがwagonwayであった。ハウギルでの1734年のwagonwayの完成は石炭の生産に大きな変化を齎した。ハウギルでは4～5の炭坑が同時に操業可能となり、年平均出炭量は1730-34の7万1千屯から、1735-39年の8万4千屯へと増加した。

ここで述べた全ての改良は必要であっただけでなく、また、費用の嵩むものでもあった⁴²⁾。小土地所有者を事業から排除したのは将に、この採炭の費用であった。富裕な事業家でさえ、必ずしも自己の炭鉱の採算を合わせられるとは限らなかった。1695-1750年のラウザー一家の炭鉱の収支をみれば、総収入608,332磅、総支出412,508磅、そして、総収益は158,628磅であった。この収益率26%は一七、一八世紀の南西ランカシャに匹敵した。但し、土地購入を考慮に入れば、1729-33年の平均利益は僅か5%に過ぎなかった。また、アイルランドでの需要の減退、不況にも係わらず、ラウザー家が被害を受けなかったのは、上記の改良を基盤とする石炭業への圧倒的支配のためであった。1737年頃は利益は4,788磅であったものが、1750年には全てで9千磅に拡大した。因みに、コーエンの利益は1742年2,142磅から1778年5,500磅であった。

ところで、ラウザー家は生産や運搬だけでなく、直接、市場とも係わった。その現れの一つが船舶の所有であった⁴³⁾。当家はかなりの数の船舶を所有していた故、順番待ちに従うことなく、船を稼動しえた。こうした優先権が当家の利益を通常以上に押し上げた。とはいえ、持ち船のうちの10隻は赤字であり、1745年にフランスに売却されたカンバーランド号は1,112磅の赤字を負っていた。

但し、船舶の所有は船長の団結を打ち破り、彼等への石炭売り渡しで優位に立とうとする意欲の現れあれであると同時に、石炭運搬に携わる船舶が1740年代には激減し、石炭産業を掘り崩すまでに深刻になったからである⁴⁴⁾。当時、アメリカやバルト海地域との貿易が収益が上がり、アイルランドとの取引は部分的でしかなかった。

また、ラウザーは自ら新規市場の開拓を率先した⁴⁵⁾。1740、50年代に販売が急速に拡大したにも係わらず、ラウザーは貿易の多様化を推し進めた。1749年、南部アイルランドに石炭を搬入し、そこからフランスに輸出しようとした。このルートではフランスの関税は半分になったからである。他方、1752、54年にはポルトガルやスペインへの輸出が試みられた。これらの計画は何れも多大な成果を収めはしなかった。しかしながら、ラウザーは石炭産業の発展にいつも積極的であった。海上輸送税 waterborne duty の請け負いにも乗り出した。1730年代の貿易崩壊の危機に際して、船の持ち株を増大させもした。

また、ラウザー家は石炭以外の産業へも係わった⁴⁶⁾。例えば、当地において1730、40年代に栄えたタバコ貿易やバルト海貿易にも間接的に係わった。当家が株を保有していたフレンドシップ号、ホープ号、コンコード号などはバルト海貿易に携わったし、同様に、ユニオン号やカンバーランド号はヴァージニアとのタバコ貿易に係わった。政治的にも当家は議会活動を通じて、当地の商人を手助けした。

更に、ラウザーは現金不足に直面した商人に小額の貨幣を貸し付けることで、重要な貢献をなした。一八世紀カンブリアでは信用は容易に得られなかったし、そして、ラウザー一家から離れて仕事ができる商人は殆ど存在しなかった。フランスへのタバコの再輸出540万磅のうちの34%を供給した、最大の企業ハウ&ケルスウィックのパートナーであるピーター・ハウとリチャード・ケルスウィックは共に1741、42年に1千磅を借り受けたし、また、ハウは独自に1742、43年に1千磅ずつを借りた。加えて、タバコ商人の中にはギルピン父子、ジェームズ・スペディングのようなラウザー家の所領差配人も含まれていた。

タバコ貿易の成行きを見てみれば、1730、40年代の隆盛によって富を貯えた者もいたけれども、50年代以降の凋落のよって破産した者も数多く存在した。1740年代の中心的タバコ商人の一人ロバート・ギルピンは1750年に破産した。前述のハウも1763年、負債4〜5万磅を残して破産した。商業の不安定さを認識して、土地に投資する者もいた。

他にも、鉄工所の経営者にも資金を貸し付けることで、係わった⁴⁷⁾。1750年代、ホワイトヘブン近郊のロウミルにおいてピーター・ハウらによって炉が建てられ、棒鉄の生産が企てられた。1753、54年にラウザー家はこの事業に5,500磅を貸し付けた。しかし、技術的には当時、主流となりつつあった石炭の利用はここでは果たされなかった。1763年、ハウが破産した年にこの事業の負債総額は32,068磅にのぼった。ハウ自身は12,410磅の負債をかかえこんだ。

こうした資金の提供だけではなく、直接地場産業に係わった例もある。しかし、その何れもが市場の動向に翻弄されるものであった。その典型が製塩業との係り合いに見出される⁴⁸⁾。海水からの塩の製造は一七世紀の初めにラウザー家の影響のもとで始められた。サー・クリストファ・ラウザーの遺言執行人は1746年に塩の販売から156磅の利益をえた。しかし、一七

世紀の過程において西部カンバーランドはリヴァプールへの対抗力を失った。1660年代にサー・ジョン・ラウザーはホワイトヘブンでの自己のなべに加えて、サマセット公からリースしたなべで操業していたけれども、当世紀の最後の十年間はそれは最早、利益を生み出さず、権利が再貸し出しされた。

1690年代から1720年代にかけて同産業は低迷した。数多くの事業家が手を染めたけれども、誰もが多くを達成できなかった。サー・ジェームズ・ラウザーは父親が借りていたサマセット公のなべのリースを更新しなかった。

しかし、1730年代に製塩業は復活し、サー・ジェームズも積極的に事業を展開した。西部カンバーランドはアイルランド貿易を再捕捉しえなかったけれども、相当な規模の地方市場への供給に活路を見出した。当家は西部カンバーランドが供給した部分のかなりの割合を担った。それが可能であったのは、燃料費が安くなったからである。

全く失敗した事例はガラス製造業であった⁴⁹⁾。ラウザー家による資金拠出のも係わらず、1738年に会社が清算された。ラウザー家はガラス工場を1740年にスペディング兄弟に貸し出したけれども、彼等は1741年末以前に工場を放棄した。当家は賃借り人を捜し求めたけれども、工場は再び使用されなかった。

このような燃料炭産業の全般的失敗は石炭売却の推移から判る⁵⁰⁾。ラウザー家の石炭売却は1695～1700年の間にその10%未満が地方的なものであった。そうした地方的消費は1695-1700年の年平均2,000トンから1746-1750年の平均16,000トンへと増大した。しかし、これは同年間に総売却に対する地方の比率が10.6%から13%へと僅か2.4%の増大を示しているに過ぎない。地方市場での好不況は産業需要の増減よりはむしろ人口の変化と密接に係わっていた。1726-30年の不況は人口の流失(移民)が原因していた。

鉄工業、製塩業、ガラス製造業での石炭の用

途は小規模でかつ短命であった故、この時期の燃料炭産業は大量の石炭を消費するものでも、多くの雇用を提供するものでもなかった。

西部カンバーランドはアメリカやバルト海で販売するための商品の生産のおいても遅れをとった⁵¹⁾。一八世紀の港湾はしばしば後背地の流通の中心地として発達した。サー・ジェームズは西部カンバーランドが海外市場向けに生産するには優位な立場にあることを認識していた一人ではあるけれども、この地方で生産された商品が大量に海外に向け搬送されたわけではなかった。カンブリアにおいて最も重要な紡毛織の産地ケンダールで生産された織物の大半はリヴァプールを通じて輸出された。サー・ジョンは1690年代にそれをホワイトヘブンに惹きつけようとしたけれども実現しなかった。尤も、それは明らかに、後背地の過疎が輸出需要を賄うための供給能力を制限し、更に、当地域で生産される商品の粗悪さが状況を悪化させていたからである。結局、過疎と地方市場の矮小さが海外市場もしくは国内市場で競合する消費財産業の確立を不可能にした⁵²⁾。

ラウザー家は社会基盤の整備にも力を尽くした⁵³⁾。しかし、それは自己の利害の中心であった石炭産業の発展に利するような場合にだけであった。全国的には内陸道路網は港湾の拡大と同時に改良された。そして、そのような発展は一七世紀後半に加速され、1695-1725年に最も顕著であった。しかし、カンブリアにおいては状況は異なっていた。港湾の発展は国内の類型に従い、ホワイトヘブン、ワーキングトン、パートン全てが拡充されたけれども、道路の改善が齎されたのは、漸く1740、50年代になってからであった。それは港湾の発展は後背地への輸送よりもむしろ石炭の積出しに依拠していたからであった。

こうした状況を強めたのは、西部カンバーランドの二つの大きな利益集団、炭鉱所有者と海外商人の間で輸送の目的と動機が異なっていたからである。石炭は海岸沿いに掘られ、また、炭

鉱主は自前の荷車や wagonway などの輸送手段を所有していたために、そこで必要とされたのは、港湾施設だけであった。それに対して、1752 年のパンフレットによれば、カンブリアの梳毛織が障害とした二大要因のうちの一つは後背地に通じる道路の脆弱さであった。商人は 1740 年代までは道路改良のための資金の手当てに苦慮していたし、他方、資金を有していたラウザー家は改良の必要を感じていなかった。

道路の改良は商人の自由裁量に任せられた⁵⁴⁾。ラウザー家は議会での法手続きに積極的な役割を担ったけれども、これは道路改善に対する当家の側からの希望というよりもむしろ、地方議員としての役割についての当家の信念によった。

社会基盤の整備において、当家はホワイトヘブンの町の発展にも寄与した⁵⁵⁾。当家は広大な土地を所有し、かつ相当な資本を有していたために、町を計画的に発展させた。1680 年代に都市計画を立案し、1740 年代には既存の街並みの外へ拡充させた。その間、家、工場、店舗の建設に対する許可はサー・ジョンの時代には 88 件、更にサー・ジェームズの時代に至っては 477 件が認められた。

三

以上のように見てくる時、ラウザー家の経済活動は下記の如く纏められる。それは現代の企業と同じように頗る経営的観点から行われた。そこでは市場における競争を通じて、市場の支配と収益の確保が第一義的に考えられていた。即ち、ラウザー家は一七世紀後半から一八世紀後半にかけて、石炭市場の激烈な変動に対処するために、一方では、他の有力な炭鉱所有者との協調を計りながら、石炭の産出量と価格を調整しつつ、また、他方では独自に炭鉱の拡大を推し進めた。この拡大は四つの石炭積出し港での石炭輸出において、他の炭鉱所有者との競合に打ち勝ち、支配的立場を確立しようとするも

のであり、事実上それは首尾よく達成された。そして、そうしたラウザー家による炭鉱経営の拡大は土地の購入と炭鉱のリースの増大によった。と同時に、当家は新技術の導入をもって、排水、有毒ガス、石炭の運搬などの問題に対処した。更に、既存の状況に止まることなく、自ら船舶を建造して、直接、市場と係わったり、或いは新規の市場の開拓にも積極的に取り組んだ。また、ホワイトヘブンの都市計画にも、中心的役割を担った。

ラウザー家が斯くも深く石炭業に係わる事ができたのも、ここでは家政での支出が問題を呈するにいたらなかったためであったと見做される。こうした危惧は事前に取り払われた。サー・ジョンの長子はその放蕩の故に、廃嫡されたのである。

註

- 1) J.V. Beckett, *Coal and Tobacco-The Lowthers and the Economic Development of West Cumberland 1660-1760*, (1981)
- 2) Ibid., p. 8.
- 3) Ibid., p. 1.
- 4) Ibid., p. 2.
- 5) Ibid., p. 3.
- 6) Ibid., p. 8.
- 7) Ibid., p. 8.
- 8) Ibid., p. 8.
- 9) Ibid., pp. 5~8.
- 10) Ibid., p. 3.
- 11) Ibid., pp. 14~16.
- 12) Ibid., pp. 19~20.
- 13) Ibid., pp. 20~21.
- 14) Ibid., pp. 25~29.
- 15) Ibid., p. 31.
- 16) Ibid., p. 35.
- 17) Ibid., p. 36.
- 18) Ibid., pp. 38~39.
- 19) Ibid., pp. 39~41.
- 20) Ibid., p. 41.
- 21) Ibid., pp. 41~42.
- 22) Ibid., p. 43.
- 23) Ibid., pp. 43~44.
- 24) Ibid., p. 44.
- 25) Ibid., pp. 45~46.

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| 26) Ibid., p. 46. | 42) Ibid., pp. 76~82. |
| 27) Ibid., pp. 46~48. | 43) Ibid., p. 84. |
| 28) Ibid., p. 48. | 44) Ibid., pp. 89~92. |
| 29) Ibid., pp. 49~51. | 45) Ibid., pp. 99~101. |
| 30) Ibid., pp. 51~52. | 46) Ibid., pp. 110~114. |
| 31) Ibid., pp. 52~57. | 47) Ibid., pp. 130~131. |
| 32) Ibid., pp. 59~60. | 48) Ibid., pp. 133~136. |
| 33) Ibid., p. 60. | 49) Ibid., pp. 138~139. |
| 34) Ibid., p. 61. | 50) Ibid., pp. 140~142. |
| 35) Ibid., pp. 62~63. | 51) Ibid., pp. 142~146. |
| 36) Ibid., pp. 63~65. | 52) Ibid., p. 155. |
| 37) Ibid., p. 68. | 53) Ibid., pp. 156~157. |
| 38) Ibid., pp. 68~70. | 54) Ibid., pp. 177~178. |
| 39) Ibid., p. 68. | 55) Ibid., pp. 180~187. |
| 40) Ibid., pp. 68, 71~74. | |
| 41) Ibid., pp. 68, 74~76. | |